

代わりの男のその代わり

登場人物

森島リイナ ……二児の母。東京在住。元地方銀行職員。現在はフリーのイラストレーター。

森島ダイゴ ……リイナの弟。東京在住。調理師。イタリアン・レストランに勤務していたが、店長に昇進する話をきっかけにハラメントの内部告発に遭う。

北野朋樹^{ともぎ} ……リイナの元夫・晋也の弟。地方在住。弁護士。

合計三名（男：二／女：一）

以下の人物は舞台上には登場しない。

森島蓮^{れん} ……九歳。リイナと晋也の間に出来た子供。

北野晋也^{しんや} ……リイナの元・夫。朋樹の兄。蓮の血縁上の父。故人。

人。高い確率で自殺と思われる亡くなり方をしている。ある程度の資産を所有しており、彼の死後、遺産と生命保険金から蓮に対する養育費の送金が行われている。

森島（長谷川）伸之^{のぶゆき} ……リイナの現在の夫。蓮の法律上の父。結婚を機に改姓。

本作は、過去に起きた取り返しのできない出来事に対してそれぞれの角度で向き合う男女三人の葛藤を描いている。舞台は日本の北関東郊外にある広い屋敷の裏庭で、物語は夏の夕方から夜にかけて進行する。登場人物は二児の母であるリイナ、彼女の弟であるダイゴ、そしてリイナの元夫の弟で弁護士の朋樹の三人。その三人がリイナの元夫・晋也の七回忌をきっかけに集まり、過去の出来事や現在の問題について話し合う様子を描いていく。

まずは朋樹からリイナに対し、晋也の遺言で続けてきた月毎の養育費の支払いを一括支払いにし、これを機に親族としての関係性に区切りをつけてはどうか、という提案がなされる。リイナは戸惑いつつもそれを了承する。

晋也は故人であり、死因は自殺である。彼は生前、妻であったリイナと息子の蓮に対して暴力行為を繰り返して、そのことが主因となって離婚に至った。リイナは晋也との離婚後に再婚しており、現在の夫・伸之との間には娘・ユナがいる。リイナはこの機会に亡くなった晋也とその親族に対する複雑な思いを朋樹と語り合い、更に弟・ダイゴについての相談を持ちかける。

ダイゴはかつてリイナと晋也がDV問題を抱えた際に積極的に問題に関与し、晋也の行為を追求する立場だった。しかし、現在のダイゴは職場でセクハラ問題を引き起こした「加害者」であり、解雇直前という状況に臨んでいる。彼らはかつて自分たちが加害者／被害者という、ある種単純化された図式の中で何を見失ってきたかを再考することとなる。

その中で、リイナは晋也との関係を振り返り、愛し合いながらも傷つけ合った過去を受け入れようとする。ダイゴは自身の行動が他者に与えた影響に気づき、謝罪や補償の必要性を感じつつも、その可能性に直面する。朋樹は弁護士として冷静に状況を整理しつつも、兄への複雑な思いを語る。

戯曲は、登場人物たちがそれぞれの「代わり」としての役割を果たしながら過去の出来事を整理し、謝罪や補償といった行為の不可能性と、それを未来に活かしていく可能性について複数の視座が交錯する様を描き出す。ラストでは舞台が夕闇に包まれつつ、彼らがそれぞれの立場で前に進むようとする姿が描かれる。

- ・ …間を取らない読点。
- ★ …前の台詞の語尾に重ねて言う。いわゆる喰い気味。
- ／ …間髪入れずに台詞の調子・方向性を切り替える。
- ∥ …この記号には二つの使用がある。一つ目は、語尾に「∥」が付き、続く行の語頭に「∥」が付く場合。この時は、間髪入れずに次の台詞が始まる。二つ目は語尾に「∥」がつき、行をまたいで同一人物の発言の語頭に「∥」が付く場合。この時は「∥」が付いた二つの台詞が、一人の連続した発言であることを意味する。この場合、必ずしも「間髪入れずに」発話されなくてよい。あくまで意味上の繋がりとして連続していることを重視し、むしろ一瞬の間があると考えた方がよい。
- 「 …大括弧。近くにある同数のこの記号と同じきっかけで始まり、重なったまま発話され続ける。必ずしも同時に開始される必要はない。
- ▲ …そでにはけながら言う。
- ▽ …言いながら登場する。
- ☆ …同じ数字の☆印を、同時に言う。

夏。日本、北関東の郊外。

大きな平屋の屋外である。舞台の一隅には、屋根があり日陰が作れるようなスペースがあり、そこにベンチが置いてある。

日没から夜にかけての劇。劇の途中から虫の鳴き声、カエルの鳴き声などが聞こえて来ても良い。

複数の屋外に曝されている椅子がある。そのうち、少なくとも一つは壊れている。

○ ダイゴとリイナ

リイナ、ベンチに座っている。ぐったりした様子。黒い服装だがゆったりしたもの。

ダイゴ、登場。大きなぬいぐるみを持って入ってくる。ダイゴは基本的に喪服ではあるがジャケットを脱いでいる。

ダイゴ (暑さにやられつつ) いやいやいや、オープンだね、車の中は。

リイナ お疲れさん。

ダイゴ 火傷しちゃうよホント。

リイナ まあでも、ちよつとはマシになってきたんじゃない？

ダイゴ ハイ、これでいい？ (と言ってぬいぐるみを軽く投げ(る))

リイナ (受け取り) ちよつと、投げないでよ！ もう、

ダイゴ ああ、ごめんごめん。

リイナ ありがとね。(抱きしめて) あー、落ち着くわア。

ダイゴ ——暑苦しいだけでしょ。(腰を下ろし) あーあ。

間。ダイゴ、ネクタイをゆるめ、持っていた扇子で自分を扇ぐ。

リイナ 普段、ネクタイなんかしないから。

ダイゴ ン？ ああ、こういう時ぐらいいはね。うん。

リイナ ——ホントは平服でもいいらしいけどね。

ダイゴ ン？

リイナ マナー的にはね、七回忌なんて喪服じゃなくていいんだ

って。

ダイゴ そうなんだ。——え・誰が言ってたの？

リイナ え、ネットです。そういうもんらしいよ。

ダイゴ へー、そうなんだ。——え・でもみんな結構？

リイナ (笑う) 喪服だったけどね。

ダイゴ (笑う) うん。

間。

ダイゴ でも、あれじゃない？ こういう時は普通お豆腐料理と

かさ。もうちよつとなんか和食っぽいのが出るんじゃないの？

リイナ ああ、精進料理みたいなの？

ダイゴ 〓そうそうそう。

リイナ フフ。ここまで来てイタリアンとはね。

ダイゴ　へんだよね？　あんなお坊さん来てるのに海鮮パスタって。

リイナ　でも、おいしくなかった？

ダイゴ　まあ、味はそこそこだったけど——。今日ぐらいオリーブオイルから離れられると思ったのにさ。

リイナ　そりゃあそうだ。

間。

リイナ　故人の好みに合わせて、ってことらしいから。

ダイゴ　あー、晋也さんの？

リイナ　うん。和食全般、あんまり好きじゃなかったし。

ダイゴ　ふーん。

間。

リイナ　でも助かったよ、今日はホント。

ダイゴ　なに、車出して？

リイナ　まあ、車もだし、付き合ってもらっちゃって。

ダイゴ　ああ、それは別に。

リイナ　居づらかったでしょ。こんな、ねえ？

ダイゴ　そうでもないよ。こっちもちゃんと気持ちがあつて来てるしさ。

リイナ　ああ、そう？

ダイゴ　久しぶりに遠出して気が晴れたよ。（笑って）というか
ヒマだしね、無職は。

リイナ　（笑わず）いや、無職ってこともないだろうけど。

ダイゴ　あるよ。実際、クビにはなってるんだし。

リイナ　でもそれってさ、え？　クビっていう、もうなに、そういう扱いなの？

ダイゴ　——まあ、ねえ。

リイナ　でも完全に辞めたってわけじゃないんですよ、まだ？

ダイゴ　そうね、籍ぐらいいは残ってるのかな。

リイナ　だよ？　だったらまださ——

ダイゴ　——でもまあ、——実質上はもう辞表待ちというかね、どうにもなんないよ。

リイナ　んん。そっかア——。

ダイゴ　のんびりするよ。ずっと休めてなかったし。

間。

ダイゴ　姉ちゃんはどうなの？　まだ気分悪い？

リイナ　ああ、大丈夫。もうちよつと休ませてもらったら。

ダイゴ　うん。——無理しないで。

リイナ　そうね・そうね。あんなエアコン控えめなの久しぶりでさ。

ダイゴ　なんであれ、年寄はエアコン嫌がるのかね？

リイナ、それには答えず笑顔で首を傾げる。

間。

ダイゴ （建物の方を指し） あれ、荷物、まだ中？ 姉ちゃん
の。

リイナ ああ、カバンとあの、あれだけ、（手提げ袋のジェスチ
ャー）引き出物じゃなくて、

ダイゴ 香典返し。

リイナ それ、香典返しただけ中にまだ。

ダイゴ そんなじゃ取って来ちゃうよ。ちよつと向こうのご親族に
もご挨拶してさ。

リイナ （立ち上がろうとして） ああ、じゃあ、行くよ・あたし
も、

ダイゴ （それを制して） いい、いい、いい！ また倒れたら大
変だから。

ダイゴ、退場。

○ リイナと長谷川、そして、その母。

リイナ、少しの間、一人でいる。

一息ついてから、ふと思いついたようにスマホをいじり出し、
電話をかける。

リイナ ——ああ、もしもしノブちゃん？ うん。今、終わっ
て。——そうね。何事も無く。——いや、そっちこそどうも。っ

て、あー、ゼリーあげた？ ユナが食べたがってた（やつ）——
え？ じゃなくて・じゃなくて冷蔵庫のさ。——（ツッコミで）

わらび餅はゼリーじゃないでしょうが。——うん。や、上の段の

ホラ、ピンクの小箱みたいなやつところに。——そうそう、蓮も
一緒に／え？ ——（ちよつと嫌そうに） いいよ代わらなくて、
いいって大丈夫だから／あ、もしもしー（電話先の相手が変わ
り、リイナも姿勢を変える） ああ、どうもすみません、わがまま
言っちゃいました本日。

一拍。

リイナ やあ、助かりますホントに。ありがとうございます。——
——いいいえ、そんな、お義母さんもお忙しいところ、——はい。
——そうですね。はい。——え？ やー、そんな、出てないです
よ、蓮の話は。——いや、ホントです・ホントですって！ ——
ええ、だから体調不良ってことで、——はい。——ええ、わかっ
てますそこは。

一拍。

リイナ え？ あー、——ちよつとまだ読めないんですけど、——
——そうですね、渋滞捕まっちゃうとまた全然なんで。——ああ、
私はこつちで適当に済ませていきますんで。——そーんなそん
な！ お気遣いなく。——もう全然、全然。いつもスーパーのお
惣菜なんですから！ ——ああ、いや、——すみません。

朋樹、電話の後半、終わりがけぐらいで登場。葡萄を持ってい
る。

リイナ (朋樹に気づき) あ、あ、ちよつとあの、あー、そしたらまた連絡いたしますんで。——ええ。ですかね、はい。お願いします。それじゃあの、またなんかあったら。——はい。はい。はい。失礼いたします。

○ リイナと朋樹

リイナ、立ち上がって挨拶する、朋樹、それを制して、

朋樹 ああ、お掛けになったままで——

リイナ すみません、ホント。お騒がせしちゃいまして。

朋樹 いえいえ仕方ないですよ、この暑さじゃ。ちゃんと水分取りました？

リイナ もうもう、はい。涼ませてもらって。大分落ち着いてきまして。

朋樹 じゃあ、よかった。(葡萄を示して) いかがです、よかったです？ ちようどおいしそうながありましたんで、

リイナ すみません、お気遣いいただきちゃって、

朋樹 どうぞどうぞ。

朋樹が小テーブルの上に葡萄を置き、リイナは申し訳程度にそれを食べる。

朋樹 回ってくるんですよここの、ご近所から。

リイナ へー。あ、いいですねえ。——あ、おいしい。すっごい甘い。

朋樹 ねえ。——(ぬいぐるみを指して) お子さんのやつですか？ その——

リイナ あ、これはあの、——落ち着くんでちよつと、借りてまして。

朋樹 ああ——。気分悪い時なんかにはね、モフモフして。

リイナ あ、朋樹さんもじゃあ——

リイナ、朋樹の座る椅子を用意しようとして立ち上がる、

朋樹 いやいや、あー、ごめんなさい。

リイナ、椅子が壊れていることに気づき、

リイナ あれ？ これなんか、あー、ダメになっちゃってる、

朋樹 ああ、それは、(朋樹、壊れた椅子を脇に寄せ) 捨てとけよって話ですよねもう、

リイナ いや、これは、——危ないですね、

朋樹 なんか、ぶつ壊しちゃったやつで。兄貴が。

リイナ ああ、晋也さんが？

朋樹 そうなんですよ、あのバカ。つい、ね。そのまんまになっちゃって。田舎の一軒家なんて土地ばかり無駄に余ってるものだから、

朋樹、別の椅子を取り、それに座る。

間。

朋樹 話の長い坊さんでしたね、しかし。

リイナ いえいえそんな、

朋樹 だからちようど良かったですよ、(リイナが)倒れてくださって。

リイナ まあ、ちよつとね。お話が好きな方なのかな、っていうのはありましたけど、

朋樹 ねえ？ ホントに。くつだらねえ話をダラダラと。言っときますんで今度。

リイナ、あいまいに会釈を返す。

間。

朋樹 日が落ちたらスツと涼しくなりますからね、こっちは。

リイナ ああ、都会とは違って？

朋樹 あっちはまた独特の暑さがあるでしょう？

リイナ そうですなそれは。熱が籠もっちゃうっていうか。

朋樹 ねえ。(奥を示し)もう、だいたい、全体としては終わりましたんで。

リイナ (申し訳なきように) ああ、そうですか。

朋樹 坊さんも追い出しましたんで、あとはもう、うちの家族が残ってるぐらいで。

間。

朋樹 それで、——ちよつとお話が、とかつて話でしたよね？

俺に。

リイナ え？ ああ、そんなこと言っていましたっけあたし？

朋樹 ええ、渡したいものがあったかって。メールのご返信で、

リイナ ああ、そうでした・そうでした。でもあの、——やあ、忘れてください。そんなあの、大したことじゃないんで。

朋樹 ——そうですか？

リイナ ええ、もう。すみません、半端なことを言ってしまうて。

朋樹 いえいえ。なんか、大事なお話なのかな、と思ってたんですけど。

リイナ、「いいんですもう」とでも言うかのように会釈する。
間。

朋樹 改めて今日は、ありがとうございました。わざわざご足労

いただきました。

リイナ いえいえ、そんな。こちらこそ呼んでいただいて——。

朋樹 この次はホント、——十三回忌ってことになりますんでね。もう、やるかやんないかもどうか、って感じなんですけど。

リイナ あんまり聞かないですもんね、十三回忌。——じゃあ、あれ？ 今が七回忌なんだから、七年後？ 違う・六年後ですか？

朋樹 ですかね。十二年目になりますから、

リイナ はいはいはい。

朋樹 だからまあ、こうして、ね。森島さんにも来ていただけてホントに、兄も喜んでると思いますんで——(頭を下げる)

リイナ そんな・そんな！ 喜んでるなんてことはないのかなどは思うんですけど、正直、んー、今日も、あたしが来ちゃっていいのかっていうのも、すごい悩んじゃってたんですけど

朋樹 〓いやいや、来てくださいよ

リイナ 〓蓮と一緒にだったらまだしも、ね、「お前だけどのツラ下げて」みたいな。

朋樹 (笑って) どのツラってことはないですよ。大歓迎ですよ。

間。

朋樹 大歓迎はちよつと大袈裟だったかもしれないですけど、

リイナ ★ですよね？ それは無いですよね？

朋樹 いやでも、歓迎はしてますって。

リイナ あたしも考えてはいたんですけどね、でも、うちの一家全員来ないっていうのもそれはそれで感じ悪いのか、とか思っちゃって、

朋樹 やあ、ありがとうございますよ。弟さんもね、あのー、ダイゴさんも、来てくださって。

リイナ 蓮の代わりにダイゴっていうんじゃ、みなさんザワついちゃったと思うんですけど、

朋樹 仕様がないうですよ。蓮はだって、フフ、——具合悪くなっちゃったんでしょう？

リイナ そうなんですすよ！ 急にホント、直前まですっごい楽しみにしてたんですけどね、朋樹さんに会えるっていうのもそうで

すし、あのー、おじいちゃんにも随分お会いできていなかったんで。

朋樹 ええ、まあ。親父はちよつとね。寂しがってはいましたけど。

リイナ ねえ。すみません、ホントに。

朋樹 いえいえ、もうお二人が来てくださっただけで。

間。

リイナ そうだ、ちよつと、あー、ちよつといいですか？

朋樹 はい。

リイナ どこからお話して良いのか、っていう話なんですけど。——相談に乗っていただきたくて、

朋樹 なんですすか・なんですすか。乗りますよ何でも。

リイナ (移動して) あたしのことっていうんじゃなくてあの、ダイゴの、相談なんですけどね。

朋樹 ダイゴさんの？

リイナ はい。相談っていうのは朋樹さんにその、——弁護士としてというか、

朋樹 (驚いて) ああ、そういう方面の——？

リイナ ええ、アドヴァイスをいただきたいくて、

朋樹 え・それはなんていうか、あのー、——事件っていったらあれですけど、なにか巻き込まれてしまったというか、

リイナ そう、そうですね、巻き込まれ、んー。どっちかっていうと、ダイゴが巻き込んだ側と申しますか、

朋樹 巻き込んだ側？

リイナ ★いや、違うのか。巻き込まれ、んー。難しいところな
んですけど〓

朋樹 〓はいはい〓

リイナ 〓えー、なんだ。どこまで言っているのかわからないん
で、あとでちよつと、本人から直接お話をさせていただければ、つ
て話なんですけどね、その、ちよつとトラブってしまったてまし
て。あ、そうそうクビ、クビになっちゃったんですよ、会社。

朋樹 ああ、そうですか？ クビ？ なんてしたっけ、あの、飲
食関係の、

リイナ そうです・そうです。料理人とかね、お陰様でちよ
つとは出世して？ 暖簾分け、とは言わないですかね、レスト
ランとかでそういうの（言葉）使うかわかんないんですけど、新
しい店舗を任せてもらうような、そういう立場にもなっていて、

朋樹 ああ、新規出店というか？

リイナ はい。それでその店長になってねー、ヨイショー、み
たいな流れだったんですけど、ちよつとトラブっちゃいまして、
あれれー、という、

朋樹 ああ、そこからクビっていうんじゃないか結構、――おおごとく大事な感
じだ？

リイナ そう・そう・そうなんです。大事。そう、大事、なんで
すよねちよつと。

間。双方、お互いが次の言葉をしゃべるのを待っている時間が
あったのち、

朋樹 あれ、ダイゴさんはご結婚とかはまだ（でしたよね）――
ー？

リイナ そうですね、独身で。

朋樹 じゃあ男女のあの、不倫がどうかの話じゃなく？

リイナ いえ、そういうんじゃない。って、いや、んー。どう
だろう？ おー、どうだ？ 大きな枠で言えば？ そういうジャ
ンルの話なのかもしれないんですけど。

朋樹 ーちよつと見えてこないですね〓

リイナ 〓ですよね！ すみません。簡単に言うとその、
朋樹 はい。

一拍。

リイナ 加害者になってしまったというか、そういう、訴え？
を受けてしまったと言うか、

朋樹 ああ、っていうともう、セクハラとかの／ああ、裁判です
か？〓

リイナ 〓いやいやいや！ 裁判にはなっていないんですけど、だ
からその、――セクハラかもしれないんですけどね、大きな、枠
で言えば？〓

朋樹 〓はい。

リイナ でもその、今はまだ社内での訴え？ といいますか、告
発といえますか／あー、いや、ごめんなさい、言い過ぎた。これ
は絶対しゃべり過ぎましたよね、あたし？

朋樹 （驚き）いや、わかんないですけど。そうなんですか？

リイナ　ちよつとどこまでご相談していいか、つていうか私
ね、どこまで言つていい話なのかつていうのもあるんで、あと
は、本人からのがいいんですけど、

朋樹　ああ、はいはい。彼の意向もね――。

リイナ　でも、あいつ一人だったら絶対誰にも言わないな、つて
感じでした。それがまた問題を拗らせていると言うか？

朋樹　んんー。

リイナ　||勝手に話終わらせようとしちゃつてるんで、

朋樹　そうですか。

リイナ　それがなんかねー。独りよがりというか、いじけてる感
じになつちやつてまして。いろいろ話してんですけどね、あたし
も。

朋樹　あー、もう処分は決まっているわけですか？　クビつてい
うのはその、社内の決定で？

リイナ　あたしもはつきりとはわからないんですけどね、なにも
話してくれないんで||

朋樹　||ええ、ええ。

リイナ　一人で納得しちやつてるつていうか、だからあんまり人
に話しちゃうと怒られちゃうと思うんですよ（朋樹を見る）。

朋樹　ああ、ご、ごめんなさい。それは、じゃあ、あとで。は
い。

間。

朋樹　むしろあの、俺の方からもご相談というか、ちよつと、――
――いいですかね？

リイナ　ええ、ええ。どうぞもちろん。「ご相談」？

と、振つておきながら黙り込む朋樹。
やがて、

朋樹　お子さんはあの、妹さんの方はもう今はあれでしたっけ？
三歳ぐらいでしたっけ？

リイナ　ああ、ユナですか？　ユナは、はい。もう、四歳で。

朋樹　ああ、もう四歳ですか？　ユナちゃん。それじゃあ結構、
もう、立派なレディだ。

リイナ　――（謙遜して）まあまあ、少しは人間らしいところが
出てきたというか。

朋樹　それぐらいの女の子だと、プリンセスがどうか、そうい
う時期ですか？

リイナ　ああ、ねえ！　ホント、大好きですね、プリンセス。何
かつちやあ、おめかしして、大騒ぎして。

朋樹　いいですね、賑やかで。それじゃあ、蓮はもう八歳、とか
になりますか？

リイナ　はい。こないだ九歳になって。

朋樹　九歳？　ハア、九歳か――や、そうですよね。こないだ会
つた時だつてもう立派なガキんちよでしたもんね。

リイナ　ああ、ねえ。

朋樹　あれがだからもう、三回忌の時だから、んー、三年前にな
るのか？

リイナ　ですかね。あの時は確か小学校入るかどうかがぐらいたつ
たから、

朋樹 それがもう三年生？

リイナ そうです・そうです。四月から、はい。

朋樹 つて、あ、四つ違いじゃなかったでしたっけ、妹さんと？

リイナ いえ、ユナとはだから、五つ違いで。

朋樹 えー、じゃあ、ちようどいいですね？ なんか、ちようど

いい感じですね？

リイナ (よくわからないながらも) ああ、ねえ。丁度、はい。

——ちよつと余裕があるっていうか、

朋樹 やあ、もう九歳かあ。

リイナ 早く感じますよね、よその子つて。

朋樹 ホントですね。あつという間っていうか、(急に体勢を変えて) いや、それで、なんですけどね——。

リイナ はい。

朋樹 あの、直球でなんなんですけど、養育費のこう、お話なんですけどね、蓮の。

リイナ ああ、養育費の。——はい。

朋樹 うーん。その、今ね、こう、毎月、その都度その都度でお支払いさせていただいているじゃないですか？

リイナ ええ。ありがとうございます。

朋樹 いやいや、それはいいんですけどね、

リイナ 本当に助かっています。朋樹さんにはずっとお手数おかけしちゃっています、

朋樹 いやいや、当然のことですから！ まあ、兄貴の遺言で、

全部あいつの金でやらせてもらっていることなんでね、それは全然いいんですけど、——残りの分をこう、なんですかね、まとめ

て？ 一括でお支払いさせていただく、っていうのはどうかな？
と思ひまして。

リイナ ——まとめて。

朋樹 ええ、ですから毎月どう、っていうんじゃないかと一括でこ
う、ドサつと。

間。

リイナ え、それは(なぜ)——？

朋樹 ちよくちよく考えてはいたんですよ。というのもあの、——
—そうなんです。だから、七回忌じゃないですか？ 今日。

リイナ はい。七回忌ですけど——？

朋樹 ひとつの区切りっていうか、そういう、気持ちもあります
て。

リイナ あー、なんか、あれですかね？ ご両親がなにか仰つ
て？

朋樹 やあ、親父はなんも言っていないんですけどね。そういうん
じゃなくて。まあ、ご両親？ というか、あれですし、

リイナ あ、あ、そうですよね、すみません。お母様は——。

朋樹 はい。もう母は(亡くなっています)——。なので、もつ
ぱら俺の気持ちの話になっちゃって恐縮なんですけど、その、

(リイナ側が) まとまったお金があった方がいいのかな、つてこ
ともありますし。

リイナ ——そりゃまあ、助かりはするんでしょうけどね。

朋樹 でしょ？ そういうのもあつて。

間。リイナ、考え込んでいる。

朋樹 額面的にはあの、——蓮が大学まで行く計算にさせてもらって。あー、だから成人までじゃなくて、二十二とか？ それで、大学の学費っていうのも、そこそこ大変だった場合の想定にさせてもらって、まあ、あの、まとめて、——っていう、はい。だからそういうたご提案、なんですけども。

間。

リイナ 一括で？

朋樹 はい。

リイナ それはあの、——戸籍上もその方がいいんじゃないかっていうような、そういう意味でおっしゃっているんですか？

朋樹 戸籍上——。

リイナ ですからウチの、今の夫というか、の、ところでその、蓮を特別養子縁組にしたらいんじゃないか、っていう？

朋樹 ああ、特別養子縁組——。

リイナ はい。今はだから、北野さんのところとも関係が残ってしまっている状態ですの——

朋樹 Ⅱいやいやいや、いいんですよ、残っていて。もちろん、血縁があるわけですからね、当然、戸籍上も残っていていいと思いますし、消せませんし。それに、——なんというか、恐らくこういったケースでは特別養子縁組にはなれないかな、とも思いますが、すし、

リイナ あ、そうなんですか？

朋樹 もちろん、いろんな場合があるとは思いますが、それぞれ状況がありますから、

リイナ ええ、ええ。

朋樹 ですからあの、全部の？ 関係を断ち切りたいとかそういう話では全く無くてですね、一定の距離があった方が蓮にとってもこう、なんですかね、——そろそろ察してくる年齢になってくるわけじゃないですか？ 蓮も。

リイナ そう、ですね。察してくるっていうのは、あたしも、はい。考えます。

朋樹 でしょう？

リイナ いろいろちゃんと、——説明をしないとイケないな、っていうのもありますし。

朋樹 名字の問題とかもあるじゃないですか？

リイナ 名字？

朋樹 はい。差し出がましい話だとは思いますが、もともととは蓮がウチの「北野」姓だったのが、こう、いろいろあって森島蓮になって——。今、長谷川さんとの養子なんですけど森島姓のままになっているわけでしょうか？

リイナ そうですけど——え、それがどうだっていう「んですか？

朋樹 「いや、ですから、んー、気を遣ってらっしゃるのかな、っていうのはありますよね、ウチに対しての、養育費もあるんだからっていう、

リイナ ああ、そういう（ことですか）——。いや、違いますよ、それは単純に、今の夫が「森島」姓になってくれたっていうだけで、それで彼は納得してくれてるわけですよ。

朋樹 納得、しているんですかね？

リイナ はい。——え、どういうことですか？

朋樹 でも、ユナちゃんも生まれて、つてなったらやっぱり、全員で長谷川姓になったほうがすつきりするじゃないですか？

リイナ それはだから、——まあ、確かに。向こうの親御さんからはそうも言われますけど

朋樹 Ⅱでしょう？

リイナ それはでも、ウチの家族の問題じゃないですか？ 女の人が名字変えて当たり前つて、そんな古い考えの家ばかりじゃないですし、

朋樹 もちろん・もちろん。そうだとは思いますが。こっちの思い過ぎかもしれないけど、でもやっぱり、ウチとの関係を整理された方が、なんでしょう、——リイナさんももつとのびびできるんじゃないかなあ、つていうこともあつて。

間。

リイナ (動揺を隠しきれず) なんかやつぱり、あー。——一括で。

朋樹 はい。

間。

リイナ すみません、ちよつと急な話で、

朋樹 ですよね・ですよね、いや全然、この場で答え出なくても当然とは思っていますんで、

リイナ でも、——出たほうがいいんですよね、答え？

朋樹 んー。まあ・まあ・まあ、それは。——でも、無理はなさらずで全然、大丈夫なんですけど。

間。

朋樹 だから、ウチとの関係をこの際に整理していただいて、それで、長谷川さんとお子さんにしていたく、といいますか。しつかり、繋がるべきところと繋げてあげた方が委員しゃないかなアつていう。

リイナ 今更ですか？ つていう風にもちよつと、正直思つてしまつたりはするんですけど、

朋樹 いやでも、——これからですからね、蓮の人生は。

リイナ それはそうですけど。でも、——ごめんなさい。今更そつういうこと言うんだなあ、つていうか、今、ちよつとそつういう気持ちにもなつちやつてまして、

朋樹 いやいやいや、そういう、あれ？ 悪い意味じゃないですよそんな

リイナ ええ、ええ。

朋樹 Ⅱ今日、蓮がここに来ていないのもやつぱり、ね。北野の人間じゃないんだから、つていう、そつういうご意向もあつてのとでしょうし、長谷川さんの、

リイナ ★違いますよそれは！ 夫がどうかじゃなくて蓮は普通に、体調が悪くなつたつていうだけで、

朋樹 ★わかつてます・わかつてます。蓮は体調が悪くなつただけですよね。そつういう話だと伺つてます。

間。

朋樹 なかなか難しいですね、こういうのは。

リイナ ごめんなさいなんか、——大人じゃなくて、

朋樹 いやいや、止めましょうよそういう、お互い「ごめんなさいごめんなさい」言ってるよなんか、ね。キリが無いというか、

リイナ それは、そうですけど。でもやっぱり——。

間。

リイナ あれですよね？ こう、すっぱりとね、——縁を切って

しまいたい、っていうとなんかキツイですけど、ごめんなさい、いや、ごめんなさいじゃないのか。だからその、整理したい、っていうか、

朋樹 まあそう、ですかね。整理。——はい。

間。

朋樹 養育費っていうのは本来、法律上はあの、一身専属義務、

という扱いになっておりまして、

リイナ イツシンセンゾク？

朋樹 はい。要するに、兄貴だけの義務っていう扱いになってまして。だから、本当は兄貴が死んだ時点でいったん、養育費の支払い義務は消滅してしまって。それであのー、それは負債とかの扱いにはならないんで相続されない、と申しますか、——兄貴の

相続分に関してはもう、蓮にもちゃんといってるわけですし。すでに。

リイナ ——負債ですか、

朋樹 あー、だから違いますよ、あくまで法律の話として、ですけどね。ともかく、もう無いんですよ。養育費の支払い義務っていうのはウチの、家族には。

間。

朋樹 いや、なんか、無神経な話し方になっちゃってあれなんですけど、もう、これ職業病なんですかね？

リイナ いや、でも、わかりやすいです。だから、

一拍。

リイナ 本来であれば払う義務のない養育費をこうして「善意」で？ 毎月毎月お支払いを続けていただいて、それも、まあ、そろそろ一区切りをつけたい、という。

朋樹 ★そう・だから、まとめて？ お支払いをさせていただくということ。これは全然、お支払いを止めるっていう話ではないですから、

リイナ ええ、ええ。

朋樹 まあ、ぶっちゃけて言えば、いつでも止めていいんですけどね。でも、そういうつもりは無いんです。むしろ、まとめて？ 一括でお支払いをさせていただくっていうお話なんですけどね。はい。——っていうことがあります。

間。

朋樹 伝わってますかね？ これ。

リイナ じゃあ、いいですよ。それで。

一拍。

朋樹 よろしいですかね？ あー、一括の支払いっていうことで

大丈夫な感じ、ですかね？

リイナ いや、それは構わないんですけど

朋樹 Ⅱありがとうございます！

リイナ でもあの、——理由が知りたいな、っていうか。え？

どうしてその、毎月のお振込みっていう形じゃいけないんですか？

朋樹 ああ、その方がよろしいですか？ 月々の方が？

リイナ ——今まではそうして来たわけですし。それで特に問題

は無かったかなアというか

朋樹 うんうんうん。

リイナ Ⅱそういうものだと思ってきちやいましたんで。

朋樹 もしかしてあの、——いっぺんに大きいお金が入ると使っ

ちやうんじやないか、とか？

リイナ そういうんじゃないですけど、——まあ、お金関係のこ

とはだいたい夫に任せてるんで。私は使う方専門ですから。

朋樹 ああ、でも、それは、——いいことですね。頼りがいのある旦那さんで。

リイナ というか、あたしにそういうのが無さすぎて。なんか、マナー・リテラシーっていうんですかね、経済観念というか、

朋樹 そんなことないでしょう。だって、リイナさんは、ねえ？ 銀行務めしてらしたわけじゃないですか？

リイナ まあ、でも、——向いてない仕事でしたから。

朋樹 あー。じゃあ、今の方が落ち着いて、というか？

リイナ 今はもう、フルタイムってわけでもないですし、子育ての合間にお小遣い稼ぎっていう感じで、

朋樹 (おだてて) でも、ねえ？ なんか、クリエイティブなお仕事をなさっておられるんでしょう？

リイナ やめてくださいよ。単なるまあ、ちょっとしたイラスト仕事なんです。(切り替えて) まあ、とにかく。銀行員って柄じ

やなかったんですよ、

朋樹 うーん。それじゃ失敗でしたかね。——(ブラックジョークのつもりで) 銀行でなんか、ねえ？ 柄でもない男と結婚までしちやって。

リイナ (皮肉として受け取り弱気になって) いや、そういうこ

とじゃないんですけど。んー。だから、晋也さんと出会っていても、そんなに長くは続かなかっただろうな、と思います銀行

は。

朋樹 はい。——って、あー、そうだ。「なんで急に一括で？」

っていう、お話でしたかね？

リイナ ——そう、ですね。はい。

間。

朋樹　なんか、しんどくないですか？　毎月毎月って。

リイナ　しんどい？

朋樹　いやだから金銭的にはね、兄貴の金ですし、まあ、いいんですけどね、

リイナ　やつぱりこう、メンタル的にしんどいといえますか？

朋樹　なんというか、——ずっと、続いていくことが。

リイナ　それは、——人間関係が、ですか？

朋樹　それもそうですし、——過去にあった出来事とかもそうですし、

間。

朋樹　（打ち消すように）主に人間関係、ってことになるんです

かね？　関わりがこう、／いや、しんどくないですか、リイナさ

んの方が？　しんどいだろうな、って思っちゃうんですけどね、

リイナ　関わり。んー。

間。

リイナ　そう、ですかね？　しんどいですか？

朋樹　まあ、——はい。

リイナ　別に私は、んー。朋樹さんがしんどい、っていう？

朋樹　や、そりゃ、しんどいですよ多少。だって、そりゃ、ね

え？　正直に言っちゃえば。そりゃそうじゃないですか。

間。

朋樹　一括にするチャンスはあったんですよ、何度も。——兄貴

がその、リイナさんと離婚して、——示談を成立させたって時もあるんですけど、兄貴が死んだ時もそうですし、——それで、相続の件も含めて全部整理してしまうっていう方法はあったわけですよ。何度も。

リイナ　でも、——なんだかんだで関係が続いてしまっ

たから。朋樹　いいんですけどね。リイナさんがそう、お望みになったん

リイナ、少し驚いて朋樹を見る。

朋樹　いや、それは全然、双方が望んだ、って話でもあると思

いますよ。だって、もともとはリイナさんこそ関係を切りたかつた

わけですもんね？　あんな、DV男とは。だからその家族と、誰

が関係が続けたのか、って話もあったんでしようし。

リイナ　まあ、確かに——。

間。

リイナ　そういう感情がまったく無かったといったら嘘になりま

すけど、——元々はこちらが一括にしてほしい、っていうお願い

をさせてもらってたぐらいですし、

朋樹　ですよ？　そう。最初は兄貴の側がこう、ある種のが

ままを言っ

リイナ　それは当然だと思いますけどね、蓮がいたわけですし。

朋樹 ええ。そういう側面もあったと思うんですけど、
リイナ だから、——そうですね。それに私も賛成してました
し。だけど、——晋也さんが亡くなってからはむしろ、私の方が
必要としたんだと思います。そういう、繋がりが続いていくこと
を。

間。

朋樹 ご不快じゃないんですか？ 俺らなんかと繋がっていて？
リイナ ——不快、とか、愉快とか、っていうことではないんで
すけど、

朋樹 だって関係ないじゃないですか？ 本来は。俺とリイナさ
んとはもちろんそうですし、今の旦那さんだってご不快でしょう
し、

リイナ でも、蓮にとって朋樹さんは実の叔父にあたるわけです
し。

朋樹 そりや蓮はそうですけどね。

リイナ お義父様とも、——血縁はちゃんとあるわけですから。

朋樹 でも、リイナさんと俺らはなんの血縁もない、というの
も、事実じゃないですか？

間。

朋樹 区切りをつけてもいいんじゃないかな、って思いました。
毎月毎月、振込を続けるという関係ではなくて、やりとりもすべ
て終わりにしてしまっただけで、——なんですかね。これ以降

はお互いの人生に干渉しませんよ、っていう、そういう関係にな
っているほうがすつきりするんじゃないですかね？ 蓮にとつて
も。そちらの、長谷川さんにとっては尚更。

間。

リイナ そんなにすつきりしたいですか？

朋樹 っ、まあ、そうですね。え、逆に、——したくないん
ですか？ すつきり。

リイナ そりやあ、あたし一人のことだったらそうしたいです
よ。でも、——そうはいかないじゃないですか？

朋樹 子供のため・子供のため・子供のため、っていうわけです
か。

間。

朋樹 もうあの、ぶっちゃけて本当の話をしますとね。

リイナ ええ、してください。ぜひ。

朋樹 恨んでますもん、本当は俺。あなたのこと。

間。

朋樹 ハハハ。いや、違いますよ。そりやあの、DVが無かった
とか信じてないとか、今更そんな話を蒸し返すつもりはないです
からね？ そこは勘違いしないで欲しいんですけど。
リイナ ええ、ええ。わかります。

朋樹 もちろん最初は、兄貴が暴力をふるっていたなんて信じられなかつたですし、だつて家族のそういう、うーん——。まあ、クズみたいな男でしたけど。陰湿で、嫉妬深くて、どうしようもない人間でしたけど。だけど、——聞きたくなかつたですよ。そりゃそりゃじゃないですか？ 聞きたくないですよ家族の、そんな話は。

リイナ ——だと思ひます、はい。

朋樹 だけど、

一拍。

朋樹 それが信じられないってわけじゃない。俺も一応、これでも弁護士の手助けですからね、いろいろと証言を聞いて、総合的に・客観的に判断をさせていただいて、——（暴力があつたという事実は）奥さんに対してでもそうですし、お子さんに対してでも、そう。——それはだから、訴訟に勝てるか負けるかという話ではなくて、実際のところ何が起きたのかな、っていう、そういう話としては十分、情報がありましたから。こういうたケースでこういう物証が揃っている場合には、つて分析したら、まあ、ね。

間。

朋樹 本人も認めていたわけですからね。そこを勘違いするようなことは無かつたんですよ、ずっと。だけど俺にとつて兄貴は、——そういう人間じゃなかつたんですよ。性格は悪かつたですけどね。ものすごく性格は悪かつたし、俺だつて何年も口を利かな

いような時期だつてありましたけど、でも、——女子供に手をあげるような、そんな単細胞じゃなかつたんですよ、兄貴は！

間。

朋樹 寒くないですか？

リイナ え？ ——ああ、全然。大丈夫です。

朋樹 急に冷えますよ。こっちは。

リイナ やあ、こんぐらいの方が私は。暑い方がダメなんで。

朋樹 寒かつたらおっしゃってくださいね。なんか羽織るものでもなんでも、（持つてきますよ）

リイナ ああ、ありがとうございます。

間。

朋樹 恨んでいる、なんて。——（笑つて）ちよつと、大胆な言葉が飛び出しちゃいましたけど。

リイナ （笑つて）恨みますよ、そりゃ。亡くなつてしまつてるんですから、お兄さんが。

朋樹 ——自業自得ですけどね！ 全部。あいつの。

リイナ いやでも、半分はあたしが殺したようなものですから。

朋樹 違います・違います！ いや、んー。そうか——。そういうことじゃないですよ、それは全然違います。フフフ。それはリイナさんも、

リイナ （笑つて）フフ。大胆な単語が飛び出しちゃいましたかね、あたしも。

朋樹　そうですよ、それは。「殺す」とかって話じゃないですか
ら、まったく。

リイナ　ねー。わかってはいるんですけど、あたしも。——そう
いう話ではまったく無いですし、でも、んー。だからすべてを、

一拍。

リイナ　自分のことと結びつけて、——晋也さんが亡くなったこ
とを、「すべて自分のせい」なんて考えるのは自惚れにもホドが
あると言いますか、——そう、思うんですけど、

朋樹　それはもう、——いろんな事情があったんでしようし、

リイナ　そうは思うんですけどね、私も。でも、——たまになん
か、それこそ夜とかに？　あー、だから妊娠していた時とか酷く
て、下の子を。

朋樹　ああ、ユナちゃんを？

リイナ　そう、なんか、酷いんですよ！　妊婦ってホルモンバラ
ンス滅茶苦茶になるんで、もう半分、っていうか、あたしの場合
はもともと性格ヤバいんで、四分の三、っていうか、十分の九ぐら
いキチガイみたくなってましたんで、あの頃。

朋樹　ああ、（身振りをして）なんか、もう、——情緒がね。

リイナ　もう、わやくちやになっちゃって。そういう時にはな
んか、お腹の中の子がこう、人殺しの子どもだ、みたいな？　—
—私人殺しのお母さんじゃん、したらこの子、人殺しの子ども
じゃん、ぎゃー、みたいになっちゃって、泣きまくっちゃって。

もうダメだ、この子と一緒に死なないとダメだ今すぐ、みたいにな
っちゃって。

朋樹　（同情的に）そうでしたか——。そんで更に、女子供をぶ
ん殴るお父さんがいて、

リイナ　（笑って）いやいやいや。

朋樹　苦労してんだなー、蓮は。

リイナ　蓮？

朋樹　ええ。あいつ、チビのくせに。——ねえ？

リイナ　ホントにもう、悪いことしてますよだから、あの子に
は。

朋樹　でも、——きつと糧になってますよ。人生の。肥やしにな
ってますよだって、肥やしっていうのはね、うんこですから。人
生のうんこ部分だけが肥やしになるわけで。

リイナ　（笑って）はい。——あ、でも、違いますよ？　あの子
にそんな、八つ当たりとか、全然あたし、そんなことはしてませ
んからね？

朋樹　|| ええ、ええ。

リイナ　そういうのは全部、旦那に向けてやってますんで、もう
ぶん殴って、

朋樹　（笑って）止めて・止めて！

リイナ　お前DVで別れたんちゃうんかい、っていうね。これじ
やどつちがDVだよ、って話になっちゃうんですけど。それもま
た罪悪感っていうか——。あー、ねえ。だから結局、——同じこと
やってんじゃない自分だって、みたいな気持ちにもなるんですけ
ど、結局、あたしがDVを呼ぶ性格っていうか？　嵐を呼ぶなん
とかみたいなそういう、——暴力を煮詰めたみたいな性格して
るから、晋也さんだってそういうのに触発されちゃったんじゃない
か、とか、あたしとさえ出会わなければ晋也さんだって、そうい

うことにはなっていないなかったんじゃないか、っていう、そういう考えにもなっちゃって、

朋樹 いや、まったく違うでしょう、それは。

間。

朋樹 違いますよ。男の暴力と女の人のそういうのとはもう、別物ですから。訴訟になったって、全然、同列に扱われる話じゃないですし、

リイナ いや、でも、甘くないですよ？ 多分、朋樹さんが想像しているような、そんなかわいい暴力じゃないですよ、あたしのは？

朋樹 (笑って) ああ、甘くない？

リイナ 道具とかも出てきますし。

朋樹 (驚いて) 道具？

リイナ もう、もう、下手したら骨折れるんじゃないか、っていうぐらいの。

朋樹 折ったんですか、骨を？

リイナ いやいや、下手したら、ですよ。まだ下手はコイてないというか、幸いにして大事には至っていない状況ではあるんですけど、

朋樹 っていうって、ウチの兄貴は死んじゃってますからね。

リイナ っでごめんなさい！ やあ、それは、

朋樹 十分、大事に至っている側面もあるんですけどね。

リイナ 違うんです、それは全然、そういう意味じゃなくて、

朋樹 ★(笑って) わかってます、わかってます。冗談ですって。

間。

リイナ 一括で、っていうのはだから、お話伺って私も理解できましたし。それはそれでもう、全然いいんですけどね、

朋樹 ——ありがとうございます。

リイナ それに、——晋也さんが亡くなってしまったことは本当にショックでしたし、残念でしたし、申し訳ない気持ちもいっぱいあったんですけど、でも私は——

朋樹 ——ええ、私は？

リイナ ようやく身の置き所が見つかったんです。——っていう、思いもあつて。

朋樹 はあ。

間。

リイナ そりや二人でいろいろとケンカしちゃっている時にはすごく苦しかったですし、怖かったですし、っていう思いもあつたんですけど——。最初は私の方が怒鳴ったり、叩いたり、っていうことも多かったですけど、でも、——そのうち・される方がどんどん増えていって、一方的になっていって——。それでダイゴとか、家庭の外に人に助けを求めるようになっていって。

朋樹 はいはい。

リイナ　そしたら今度、——私は一方的な「被害者」みたいな話になっていって。確かにそうなんですけど、でも、——蓮と比べたらやっぱり私には、自分から叩いたり、モノを投げたり、つていうこともあったわけですし、やり返すことだって出来たわけですから、だけど、——弁護士さんが入ったらそういう、自分のやったことはいったん全部脇において、あれをされた・これをされた、こんな酷い目に遭った・こんな酷いことをされた、つてそういう話ばかりになっていって——。だから、晋也さんが亡くなつて初めて、こう——

間。

リイナ　全体像を取り戻せたというか、二人の。

朋樹　——全体像？

リイナ　だから、あの、朋樹さんにはホント、迷惑でしかない話なんですけど、でも——

一拍。

リイナ　晋也にあれをされた・これをされたつていう話じゃなくて、本当はだから、ぶつかりあって、傷つけ合つて、モノを投げ合つたりもしたけど愛し合つて、つていう、そういう本当の場所が、なんか、——隠されてしまつていたから。いろんな人の言葉で隠されてしまつていた・そういう場所を、——ホントご迷惑なお話なんですけど、晋也さんが亡くなつて、朋樹さんとお話をさせていただくようになって、ようやく取り戻せたというか——。

そういう場所をだから、もう失いたくないつていうか、——へんな考えなのはわかつてるんですけど、そういう、思いがあつて。

朋樹　ええ、ええ、ええ。

朋樹、ハンカチ、若しくはティッシュをリイナに渡す。

リイナ　すみませんなんか、

朋樹　いえいえ。

と、ここでダイゴが戻ってくる。

○ リイナと朋樹とダイゴ その1

ダイゴ　やあ、どうもこれもこれは。

朋樹　ああ、ご無沙汰してます、ダイゴさん。

ダイゴ　いやいやこちらこそ、

朋樹　こんなクソ田舎までお越しいただいて。

ダイゴ　そんなそんな。

朋樹　すみませんね、お忙しいところ。

ダイゴ　いやいや、ああ、

ダイゴが椅子に座ろうとすると、

朋樹　あー、その椅子はバカになつてるやつなんで、こっちの、

朋樹、別の椅子を勧める。

ダイゴ ああ、すみません。

ダイゴ、勧められた椅子に座り、

ダイゴ (荷物をリイナに渡しつつ) なに大丈夫？

リイナ (平然を装って) 大丈夫・大丈夫。どうだったそっち？

ダイゴ ええ、だから話してきたよ。

リイナ ああ、そう。お義父さまと？

ダイゴ そうそう。

リイナ Ⅱなんかおっしやってた？

ダイゴ ー？ いや、そんな別に。軽く挨拶みたいな感じだったけどね。

リイナ ああ、そう。――(あなたのことを) 誰だかわかったの向こう？

ダイゴ だから、自己紹介して。

リイナ ああ、そっかそっか。

ダイゴ なんせ葬式以来だからね。すごい複雑な空気が流れてたけど。

リイナ ーでしようね。

間。

リイナ、壊れた椅子に視線を寄せている。椅子を指して、

リイナ (朋樹に) あれみたいですわね、なんか。銃弾で穴が空いたちゃった絵みたいなの？

朋樹 ーなんですわ、それ？

リイナ 知りませんか？ なんかウォーホルの絵に誰かが銃をぶっ放して。かえってその絵の価値が上がった？ みたいなの。その、壊したことによって。

朋樹 なんの絵ですか？

リイナ え、確かなんか、モンロー？ マリリン・モンローの絵に、銃弾でこう、

朋樹 へー、それで価値が上がったんですわ？ 壊れちゃったのに？

リイナ みたいですわよ。あ、現代アートなんで。

朋樹 ああ、わけわかんない世界の話か。――ダメですよねそんな、女の人を銃で撃っちゃ、

リイナ いやでも、絵ですからね？ モンローを実際に撃ったわけじゃなくて。

朋樹 いや、絵だとしても、ねえ。

ダイゴ 実際に撃たれたのはウォーホルの方だもんね。

朋樹 ああ、そうでしたっけ？ ウォーホルってそういう、――ジョン・レノンの結末でしたっけ？

ダイゴ いやいや、殺されちゃったわけじゃないんですけどね。なんか怪我したとかで。

朋樹 ああ、

リイナ ええ、なに？ じゃあ、死にはしなかったけど、実際に撃たれたってこと？

ダイゴ そうねえ。なんか、尖りきつたフェミニストみたいな人に、撃たれたんだって。

レイナ えー？ なにやっつてんのそいつ。

ダイゴ いや、知らないけど。

レイナ ああ、でもあれか。——（朋樹に）事情があったんですかね？ その人にも。

朋樹 んー、ですかねえ。

ダイゴ 事情があつたつて撃つちやダメなんだけどね。

レイナ そりゃそうか。

ダイゴ 当たり前でしょ。

朋樹 あ、なんかダイゴさん、そう言えば会社クビになつたんですつて？

レイナ ★ちよつと・ちよつと！

朋樹（レイナに）いや、こういうのは迂回しないほうがいいのかな、つて。

レイナ 単刀直入過ぎるでしょ。

ダイゴ（レイナに）ええ？ なにを話したの？

レイナ（ダイゴに）や、何も言つてないよ。朋樹さんに相談したほうがいいって話になつてたから、その導入っていうか。

ダイゴ いやいやいや、そんな勝手な。

レイナ 無いんだから、こんな機会。もうね、これはいっそ、私のためだと思つて相談してほしい。

ダイゴ んん？ どういうこと？

レイナ 弁護士さんなんかいないでしょ、知り合いに？ いろいろ法律上のこととかでもいいし、人生の先輩としてでもいいし、

ダイゴ や、迷惑でしょ普通に。（朋樹に）すみませんね、なんかヘンなこといっちゃつて、

朋樹 まあまあ、でも、いったん聞きますよ。ああ、じゃあ、ちよつと、ちよつとといったん、お茶でも淹れてきますんで。

ダイゴ え？ ああ、いいですよそんな、

朋樹 なんか飲まれます？ 緑茶で大丈夫ですか？

ダイゴ いやいや、僕は別になんでも——、じゃなくてその、

朋樹 レイナさんは？

レイナ あー、じゃあ、あたしは緑茶以外の何か、

朋樹 それじゃあ、コーヒーとか？

レイナ コーヒー？（嫌そうに）コーヒーかあ——。

ダイゴ わがままいってんじゃないよ。

レイナ だってコーヒー飲めないんだもん、

ダイゴ だったら緑茶でもいいでしょうが、

レイナ 「えー。」

朋樹 「じゃあ・じゃあ、なんか見繕つて。お冷とかでもね？

レイナ あー、もう水で全然、はい。ハーブティーとかでも全然、大丈夫ですから。

朋樹 ——ああ、はい・はい。

朋樹、何度か頷いて、退場。

○ ダイゴ、レイナ

ダイゴ ハーブじゃねえんだよ、なにいつてんだよ。

リイナ いや、おいしかったんだよ。さっきのあれ、飲まなかった？

ダイゴ だとしても、さ。——で、何？ どこまで話したの？

リイナ いや、別にそんな。大したことは何も、

ダイゴ 言ってたじゃん、クビになったとかかってもう、

リイナ それはだから、いや、それだけだよ。クビになったよ、って。

ダイゴ ホントかよ。

リイナ ホントだって！ いろいろ内容はだから、ダイゴの方がら相談させてもらうから、っていつて、

ダイゴ なんでそんな勝手に。

リイナ いいから・いいから、聞いというて損は無いからさ。

ダイゴ いいよ別に。

リイナ というか、あたしだつてちよつと相談したいこともあつたし、——その道の、先輩としてさ。

ダイゴ なに、その道って？

リイナ んー？ だから加害者家族、っていうの？ そういう、なんか立場のさ。

ダイゴ ああ。

間。

ダイゴ 別に姉ちゃんを巻き込むことは無いから、

リイナ そうはいかないでしょ。

ダイゴ 大丈夫だよ。だって、んー、あくまで職場の話なんだからそんな、家族がどうのってという話じゃないし、

リイナ いやでも、あたしん時に散々あなたには力になってもらってるんだしき。ここで知らん振りは出来ないでしょ？

ダイゴ いや、していいと思うけどね。全然、関係ないしね、

リイナ あんたのためにもよ。

ダイゴ だから自分でなんとかするって。うん。ありがとね。弁護士だつて別に朋樹さんじゃない人を見つけてくればいだけの話だし、

リイナ ★そんなこといって誰も見つけてこないじゃない。探す探すっていつてちよつとも。

ダイゴ それは別に、——急いでいないっていうだけで、

リイナ あんたのためっていつてるのはだから、——あんたがどんな顔して生きていくのかを決めるためだよ。

ダイゴ んん？

リイナ 絶対やつとした方がいいから！ この先の人生でどんな顔して生きていくのか、それを今日、ここで決めていくの。

間。

ダイゴ どういうこと？

リイナ 吐いた唾をどう飲み込むかじゃないけどさ、あんたが今まで言ってきたことのケリをつけておいたほうがいいんだよ、絶対。

ダイゴ ——いや、どういう話なのか全然わからないんだけど、

リイナ 被害者ヅラして生きていくのをどこで辞めんのか、って話だよ。

ダイゴ 別に、——被害者ヅラなんてしてきたつもりはないよ、

リイナ ★してきたでしよ散々？

ダイゴ ええ？

リイナ ——もう被害者ですとか、サバイバーですとか、そういう顔して生きていける立場じゃないんだよ、あんたも、あたしも。

ダイゴ ——（納得せざるを得ないという様子で）うーん。

リイナ 言ってたでしよ、あんただって？ 朋樹さんと会ったらいろいろ謝んなきゃいけないことがあるって。

ダイゴ ー、いや、それは今、関係ないでしよ、

リイナ 関係、しかないでしよ。なにいつてんの。

ダイゴ いや、——そういう、謝んなきゃっていったのはだから、朋樹さんに対してじゃなくて、もともとは晋也さんに言ったことについてのその／昔の話でしよ、もう？ 今更取り返しがつかない話だよ。

リイナ それを代わりに引き受けてくれたんじゃないか、朋樹さんが。

一拍。

リイナ 私の言ったことだったり、あんたの言ったことだったり。それこそ取り返しがつかないことを全部あの人引き受けてきてくれたんでしよ？

ダイゴ ちよつと待ってよ、っていうか、なにをそんなに熱くなくてんのよ。

リイナ （素直に）んー。確かにね。——ちよつとまあ、熱くはなってるか。

ダイゴ ーうん。

リイナ ——また熱出ちやうか。

ダイゴ ーだから休んでてって言うてるでしよ。

リイナ うん。それはそうなんだよね、たしかに。

リイナ、ちよつとリラックスした姿勢になる。

間。

ダイゴ まあ、でも良い機会か。これ多分、——僕の人生で朋樹

さんと会うの最後だもんね？

リイナ 知らないけど。まあ、——そうかもね。向こうは向こうで縁切りたがってる感じだったし。

ダイゴ あ、そう？ 縁切る？ って、なに、そんな不穏な話をしてたわけ？

リイナ 不穏ってわけでもないんだけど、——だって七回忌だし？ なんかのホラ、ケジメをつけるための儀式なわけでしよ？

ダイゴ そうなの？ え・七回忌ってそういう儀式なの？

リイナ なんとなくだけど。

ダイゴ なんだよそれ。え、なに、もう来るな、みたいなことを言われたわけ？

リイナ ー、だからなに、養育費の支払いをさ、

ダイゴ あー、なに？ 止めたいて？

リイナ じゃなくって。全部一括にしてお終いにしちゃいたいんだって。

ダイゴ へー。ああ、えー？ 一括で？

リイナ うん。

一拍。

ダイゴ え、いい話なんじゃないの？ それ。

リイナ まあ、経済的にはね。

ダイゴ ——なんかあんのそれ以外？

リイナ 当たり前でしょ、そりゃ。

ダイゴ なに？

リイナ ——そりゃあ、いろいろとき。あるでしょうよ。

ダイゴ はあ？ いろいろと？

朋樹、登場。小さなお盆に飲み物を三つとちよつとしたお茶菓子を持ってくる。

○ リイナと朋樹とダイゴ その2

ダイゴ ああ、どうもすみません。

朋樹 いえいえ。あの、これも良かったら一緒に。

と、いつてちよつとしたお菓子を勧める。

ダイゴ ああ、ちんすこう？

朋樹 アホですよねこんな席で。なんか叔父さんがこないだ沖縄行ったっていうんで。

ダイゴ 「ああ。

リイナ 「えー、あたし好きなんですよ。これー。

朋樹 ああ、じゃあ良かったです。

リイナ なんか絶妙に重すぎないというか。食べても罪悪感そんな無いし。

ダイゴ 罪悪感？

リイナ や、カロリーのね。なんかヘルシー感あるでしょ？

ダイゴ ああ、そう、（朋樹に）なんですかね？

朋樹 んー、かもしんないですね。黒糖ですし。

ダイゴ まあ、マリトツツオなんかよりはヘルシーかもしれないけど。

リイナ こういうお土産ってあんことかクリーム入ってるやつ多いじゃないですか？ ギルティなんですよ、ああいうものは。

ダイゴ ギルティ。

朋樹 それで、——何のご相談なんですってつけ？ ダイゴさんがなにか、——ねえ？

リイナ ああ、はい。

朋樹 なんか、——ギルティな加害者になってしまったとか。

ダイゴ （リイナに）★ちよつとどこまで喋ってんのよ。

朋樹 いやあ全然、それだけですよホント。今ので全部ぐらいの話で。

リイナ （朋樹に）ですよね？ （ダイゴに）騒ぐなやいちいち。

ダイゴ ああ、でもちよつと良かったです、そういうのとは別に僕も朋樹さんにお話したいことがあったんで、

朋樹 ああ、なんででしょう？ とにかくまあ、聞きましょう。

間。

ダイゴ あの、最初に言つとくとですわね

朋樹 〓はい。

ダイゴ ——僕は絶対、朋樹さんにも、もちろん晋也さんにもお詫びをしたとか、そういうことではないですからね。絶対に謝つたりはしません、この、一連のことについて。

朋樹 ええ、それはもう、(大丈夫です)

ダイゴ ただ、難しいんですよ。——完全に矛盾してしまつてる二つ(の思い)があつて、それをどう、解決していいのかわからなくつて。

朋樹 ——それがダイゴさんのご相談？

ダイゴ 「んー。

ライナ 「いや、そういう抽象的なことじゃなくて、もっと具体的なお話を、とは思つていゝるんですけど、

朋樹 そうですよ、そういう、法律的な、

ライナ はい。

ダイゴ いや、それは姉ちゃんが勝手に言つてることなんです。自分としては、抽象的？とも思われないんですけど、そういう気持ちの問題つていうか、——大切だと思つて。

朋樹 ええ、ええ。

間。

ダイゴ 難しいつすね。本当に。朋樹さんもだから、ずっと難しかったんだろうなあとは思つてますよ。僕はそれを、——ちよつとは分かつていゝるような気持ちになつていたんですけど、全然分

かつていゝなかつたんだな、つて今回、自分が似たような立場になつてみて初めて分かつたつていゝるか。

朋樹 似たような？

ダイゴ いや、でも僕が似たような立場になつたつていゝのは朋樹さんというよりは、晋也さんの方なかもしれないですけど。

朋樹 兄貴と？ んん？ 兄貴と、ダイゴさんの立場が似ていゝんですか？

ダイゴ はい。だからこれは、晋也さんの代わりに朋樹さんに言つていゝことじゃないのかもしれないですけど、

朋樹 つていゝとあれですかね、なんか、——(明るく)女房子供をぶん殴つたわけですかね、ダイゴさんが？

ダイゴ ——僕は独身ですわ。

朋樹 (笑つて) はい。伺つてます。だから全然、似たような立場じゃないと思つていゝですけどね、つていゝ。

ダイゴ それに僕は、ゲイですわ。

朋樹 (真顔で) へー。——初耳です。それは。

朋樹、確かめるようにライナを見る。

ライナ (首を振つて) いや、はつ、初耳ですわ。あたしも。

朋樹 あ、え？ お姉さんも？

ライナ (ダイゴに) ええ？ そうなの？ そういう話なの？
朋樹 あ、へー。初耳だったんですわ。え？ じゃあ、あれ？

ダイゴ いや、なつてないですよ別に。何も複雑には。

朋樹　でもなんか、——すみません、アウティングっていうか、お姉さんにも言つてなかったんだったらなんか、やー、こんなタ
イミングで言うことでもなかったのかな、って。

ダイゴ　んー、いや、それはいいんですけどね、

朋樹　あー、申し訳なかったですね・なんか、

ライナ　え、え？　ギャグとかじゃなくて？　ホントに？

ダイゴ　なんでギャグなんだよ、ホントだよ。

ライナ　えー、そんな、あー、えー？　そう？

ダイゴ　気をつけてよちよつと、もう、そのリアクションがすご
く差別的だからね、

ライナ　★いやいやいや、そんな！　びっくりはするじゃんだつ
て、あんた昔、彼女さんとかいたこともあったしき、って、あ

れ？　じゃあ、あれはウソ？　ウソの彼女？

ダイゴ　別にウソじゃないよ。あの人はあの人でちゃんと付き合
ってたし、

ライナ　いや、ごめんごめん。なんか、びっくりしちゃって、そ
んな偏見を押し付けるつもりとか一切無いんだけどさ、

ダイゴ　その感じがもう偏見の塊なんだよ、ごちそうさまでし
た。

ライナ　★なあんでよ！　びっくりしただけじゃん、急に言うか
らさ、

ダイゴ　スツと流してくれよこんぐらい。なんでいちいち「偏見
を持つていない私アピール」を浴びせられなきゃいけないんだ

よ、面倒くせえ。

ライナ　はあ？　してねえだろそんなアピール。

ダイゴ　そう感じてるんだよこっちが、

ライナ　なに？　そう感じさせてしまったんだから、そっちに合
わせろっていうの？

ダイゴ　|| そりやそうだろ！

ライナ　そういうね、——ああ、もう、大っ嫌いなんだあたし。
——他人にアッデートを求めて来んな。

ダイゴ　いやいやいや、「常識としてき。

ライナ　「もうね、もう決めたんだからあたしは！　誰かのため
に自分をアッデートなんかしないからな！　被害者らしくない
とか散々言われてきて、——結構だよ、被害者らしくない被害者
で。今後ともあたしはあたしの良心に従ってなんか、——そうい
う感じでやっていくからな！

ダイゴ　わかったよ、わかった、って。いいんだよ別に、姉ちゃ
んにそんなこと期待してないんだから、最初から何も、

ライナ　んん？　それなに、どういう意味ちよつと？

朋樹　★いやあー、ごめんなさい！　ごめんなさい俺もなんか、
ねえ？　不本意なタイミングでこんな、いや、そんなつもりじゃ
無かったんですけど全然、

ダイゴ　いいんですよ。時間の問題、っていうか、状況的に隠し
ておける感じじゃないことはわかってましたんで、

朋樹　あー、そ、そうでしたか？

ダイゴ　というかむしろ、まったく気づいてなかったんかい、つ
て今、驚いているぐらいですから。

朋樹　そういうことなら、まあ、

ダイゴ　だからいったんその話は置いて、

朋樹　はい。じゃ、じゃあ、まあ、ライナさんも、ね？

ライナ　ええ、いいですけど。

ダイゴ そのまあ、——（半分ヤケになって）だから要するにセクハラですよ、セクハラ。そういうだから、——ギルティな加害者になってしまったっていう話です。僕が。

間。

朋樹 それはあの、——ダイゴさんとしてはそういう意図は無かったというか、その、真面目なお付き合いだったということなんですか？

ダイゴ そりゃあ、ね。セクハラしようと思ってする奴いないじゃないですか？

朋樹 ー、そうですね。

リイナ いると思うけどね、普通に。

ダイゴ だからまあ、こつちにはこつちの思いがあった、つていうのは確かなんですけど、ふざけてとかじゃなくて真剣なつもりでしたけど、でも、——それは僕がどうこういったって仕様がないう話なんでね。あー、その、職場のね。後輩的な立場の相手だったんで、向こうが。

リイナ 「ああ。

朋樹 「なるほどその、——権力勾配のある関係性だったというか、

ダイゴ そういうことです。あー、その、（ふたりの様子を窺いつつ）クビ、クビになったっていうお話はもう、ご存知なわけですよね？

朋樹 ええ、「なんか軽く伺って。

リイナ 「そうですね・そうですね。

ダイゴ まあ、——解雇ってわけじゃないんですけど、流れるに？ 最後の温情で自主退職にさせてもらえる、つていう、そういう状況なんですけど。

朋樹 はいはい。確かにそれは、うー、ある意味では、うちの兄とも似たような立場というか、や、まあ、違いますけどね。でも、はい。わかりました。

間。

ダイゴ ーん。まあ、未だに——。本当のこと言うと別に、似たような立場に立った、なんて思いたかないんですけどね。晋也さんと。僕と。

朋樹 そうですよ。

ダイゴ だって僕は独身ですし。ゲイですし。つまり、妻もいないけど子供もいない。という、／まあ、子どものいるゲイだっていますけど、僕はそういう立場ではないし。

朋樹 はいはい。

ダイゴ そもそも、——僕と晋也さんとは何の関係も無いはずだったんですよ。元々は普通の、ほとんど関わることもない単なる義理の弟、つていう、そういう立場だったと思うんです。朋樹さんだってそうでしょう？ 僕らは、お互いにそうだったはずじゃないですか？

朋樹 そうですね。だと思えます。

ダイゴ それが、姉ちゃんとのイザコザがあつてちよつと絡まざるを得なくなつて、——許せなかつたんですよ、僕は最初にその、——いや、姉ちゃんとのことはまだしも、——もちろん暴力

はダメですけど、でも、——まだしも姉ちゃんとの話はなんか、男女の間のイザコザというか、

朋樹 ええ、ええ。

ダイゴ そういふ話だったから・まだ納得できるというか、しようもない話だな、つていう、まあ、姉ちゃんだつてかなり無神経な人間ではあるし、とにかく、別に僕が立ち入るような話では無いと思つていたんですけどね、でも、でもですよ？

朋樹 や、まあ、わかりますよそれは。蓮くんのことがあつて、という

ダイゴ そうですね。——蓮のことがあつて。僕はその話を聞いて、姉ちゃんからその、——あいつが痣を作つてるところだとか、そういうのを見せてもらつて、僕はそれを、——黙つていゝるわけにはいかないと思つたんです。とにかく逃げて、避難して、つてことで済むような話じゃない。どうしても晋也さんに物申さずにはいられたかつた。何をやってんだあんたは！ つていう、そんなふざけたことが許されると思つてんのか！ つていう、そういう思いがあまりまして、

朋樹 ええ、ええ、ええ。

ダイゴ それで僕は、——晋也さんの職場の方を巻き込んで、とかもそうですけど、本人に直接、言いたい放題のことを言つてしまつて、それで結局、——取り返しのつかない結果になつてしまつて。——生きてる価値ねえよとか、死ぬよお前とか、そういう暴言を吐いてしまつて、それで、——本当にどうしようもない結果を生んでしまつたんですけど、でも、——自分がどうしようもないな、つて思うのは、僕は全然、晋也さんの葬儀の時にせよ、——全然、こつちに非があるとは思つていなかった。謝るような

ことじゃないと思つていたんです。逆に、何を勝手に死んでるんだよ、つて。ますます蓮に大きな傷を与えて、たくさんのものを奪つてしまつて、何をやってるんだよ！ つて、

朋樹 ★やあ、やあ、だから、——いいと思いますよそれで。自業自得ですからねあのバカは。まあ、そう思いますよ、俺も。ダイゴ いや、違ふんです、それは。そういうことじゃなくて。違ふんです。

間。

ダイゴ そりや、たとえば、晋也さん単体のことでいつたら、そのうなのもかもしれません。

朋樹 単体？

ダイゴ 自業自得つていう、ね。でも、じゃあ、それについての文句、というか、そういうのを聞かされる朋樹さんはどうなのか？

朋樹 ああ、俺ですか？

ダイゴ 僕は朋樹さんに対してもいろいろと失礼なことを沢山言つてきたし、それについてのお詫びだつてまともにしたことは一度もないし

朋樹 しいやいや、いいですよそんな、

ダイゴ 良くないんです。そもそも僕はああいう、——重大な結果を生んでしまつたことに対してのお詫びを一度もしたことがない。親御さんにも。朋樹さんにも。一度も。一言も。

間。

ダイゴ　それでいいと思っていました。でも、僕はいつかお詫びしたいという気持ちもあつたんです。少なくとも、朋樹さんに対しては。だって僕はなんか、——同じような、その、自分も姉ちゃんの弟、っていう、そういう立場から朋樹さんのしていることを見たら、あー、そこまでできるかな、っていう思いもあつたし、——別にこの人は何もしてないじゃないか、っていう、なんの悪いこともしていない人に対して何を僕は、こんなに好き放題にいつているんだらうって。でも、それじゃあ、——蓮の受けた傷はどうなるんだよ？　踏みにじられたあいつの思いはどうなるんだよ？　っていう。そういう思いもあつて、だって、

間。

ダイゴ　怒れないじゃないですか、あいつは？　最後までずっと好きでいたんだから。そりや怖がつっていた部分もありましたけどね、でも、——最後までお父さんをずっと好きでいたんだから、だから、僕が感じていた晋也さんに対する怒りっていうのは、んー、受けた傷に対しての反発とか、復讐とか、そういうことじゃなくて、——晋也さんが亡くなってしまったことで、たとえば、蓮が手に入れることができなくなってしまった多くの時間とか、そういう、分かち合うことが出来なくなってしまう感情とかに對して、——なんでだよ、っていう、酷いじゃないか、っていう抗議だったというか、僕には、そういう思いがあつて、

朋樹　当然ですよ。当然の感情だと思います、それは、

ダイゴ　だけど僕は今回、同じことをしてしまった。

間。

ダイゴ　無力な人間に対して、抵抗できない立場の人間に対して、自分の感情で好き勝手なことをするっていうのは、それは——。そんなつもりじゃなかったとか、こつちには愛情もあつたんだとか、そういう、僕が言いたいことは全部、あの頃、晋也さんだって、ずうつとずうつと喉まで出かかっていた言葉だったはずで、僕はそれを、——何も言わせないような話し方をずつととしてきてしまった。まったく、聞く耳を持っていなかった。そのことに、こんな状況になって初めて気がつくっていうのはもう、本当に救いようのない話なんですけど——

朋樹　||いやいやいやいや！　もうもうもう、すみません、なんか、こんなことを話させてしまつてそんな。

間。

朋樹　まあ、落ち着きましょう。どうせ本人はもう、ね？　おつち死んでるわけですから（笑）　俺らがここで、代理戦争みたいなことをするのはバカげてますよ、

リイナ　それは本当に。

朋樹　ああ、じゃあ、ここに席を設けましょう。ヤツのね。こーう、被告人席を用意しておきましょう。

朋樹、壊れた椅子を少しだけ別の場所に置き直す。

リイナ　それってあの、晋也さんの（席）？

朋樹　そうですそうです。（椅子の座面にぬいぐるみを置き）これ、こういうのを置いておきましょうそれじゃ。

リイナ　（すぐに取り返し）ダメ！ やめてください、絶対！

朋樹　ああ、そうですか？　じゃ、じゃあ、もう裸の椅子でね。

うん。——いずれにせよ、あのバカのせいであらうこれ以上揉めるのはうんざりですから。でしよう？　ダイゴさんだって。

ダイゴ　ああ、いや、揉めるつもりはないんですけどね。

朋樹　ええ、だと思えますけどね、でも、——誤解が起きないように、こう、（椅子をいい感じの向きにして）こうしておきましょう。うん。

一拍。

ダイゴ　なんか、すみません。いろいろいっぺんに話してしまつて。

朋樹　やーでも、俺の方もなんか、——そうだよなあ、っていうね、ありましたんで。

間。

三人でその椅子を眺めるような立ち位置になる。

○ リイナと朋樹とダイゴ その3

朋樹　俺からもちよつと、——一言いいですか？

ダイゴ　ああ、もちろんです。

朋樹　いや、あの、

朋樹、一息ついて。

朋樹　全然、伝わってましたよ。そういう、あの、ダイゴさんがさつきおっしゃっていた思いというか、ね。生前の兄からものだから、——ダイゴさんからいろいろとお話を伺って、それがものすごく効いた、という、一番、応えたよ、って、そういう風に言っていましたんで。

ダイゴ　——晋也さんが？

朋樹　ええ。／＼っていつても違いますよ、それでどうこう（自殺した）っていうんじゃないかと、あくまでもその、自業自得は自業自得だと思いますけどね、

ダイゴ　（朋樹の気遣いを理解して）ええ、ええ、はい。

朋樹　でも、そういうことを生前、ダイゴさんが強くおっしゃってくださったって、それはまあ、うーん。ちよつとこんな言い方は妙ですけど・すごく、——幸せなことですよ。

ダイゴ　幸せ？

朋樹　それまでの兄貴は言い訳ばかりだったというか——。それを、ダイゴさんと話をするのでようやく自分のやったことと向き合えた。そう、初めてね。（椅子に向かって）だろ？　なあ？　——それは多分、幸せなことだったんじゃないですか？

間。

朋樹　まあ、ねえ。それで死んじまうぐらいだったら向き合わない
くたつて良かったじゃねえか、っていう気持ちもありますよ？

俺からしたらそんな、——ねえ？　あるんですけど、でも、——
向き合えた分、まだマシだったのかなア、っていう気持ちもあり
ますんで。

間。

朋樹　ごめんなさい、一言なんていってこんなにベラベラしゃべ
ってしまつて、

ダイゴ　いえいえ、そんな。

朋樹　えーと、だから、なんでしたっけ、その、

ダイゴ　んーと、なんでしたっけね（笑）——どうでもいい話な
んですけどね、今更。

リイナ　どうでもよくはないでしょ。

ダイゴ　自分で言つててなんか、——我ながら勝手だな、という
気がしてきちゃつて、

朋樹　でも、必要なことなんじゃないですか。——ダイゴさんが
許されるっていうか、そういうことを求めているわけですから。

一拍。

朋樹　だからその、今の揉めてしまっているお相手の男性？　か
ら許されるってこともそうですし、そのためにはダイゴさんも誰
かを許す必要があつて、——うーん。まあ、うちの兄貴のことと
はまた別かもしれないけど、

ダイゴ　でも、謝れないんですよ、僕は。もう。

一拍。

ダイゴ　だつて、取り返しがつかないものは、どうやったって取
り返しがつかないわけですし、謝ったところでやつてしまったこ
とが消えるわけじゃないですし。

朋樹　だけど、——謝罪とか、補償っていうのは過去を消すため
にあるんじゃないかってその、——次に進むための手続きでもあるん
じゃないですか？

ダイゴ　蓮に対して、——なんですけどね、
朋樹　——ええ。蓮に対して？

間。

ダイゴ　思うんですよ、だから。——あいつが大きくなっていっ
た時に、何をどう説明してやればいいのか、つて。今回の僕の
こともそうですし、——お父さんが生きている間にしたこと、
亡くなり方にしても、その、何を、どう伝えても全部は伝わらな
いような気がしてしまつて、

間。

ダイゴ　なにか、悪いことの積み重ねとして蓮が生まれてきたん
じゃないよ、つていうことだけはね、いや、確かに状況として
は、良いことの積み重ねだよ、お前はみんなに望まれてきたんだ

よ、っていうきれいな話だけには出来ないのかもしれないですけど、でも、——絶対に悪いことの積み重ねではないんだよ、っていうことをね、なにか、／いや、どの立場で言ってるんだお前がつて話なんですけどね。僕がぶち壊しといてなんなんだよ、つて話なんですけど、全部。

間。

朋樹 (リイナに) どう、思います？ これ。

リイナ あ、あたし？

朋樹 ええ、だって。お母さんですし。

リイナ まあ、はい。お母さん——。

朋樹 (椅子を示して) お父さんあんなですし。

一拍。

リイナ 私はでも、——そんなに心配ないんじゃない？ つて思いますけどね、蓮のことは。

間。

リイナ どうせ全部はわかんないんですし。——それは子どもだからとかじゃなくて。やつぱり、知らないことは知らないし、会えない人とは会えないし。

朋樹 ——そうすねえ。

リイナ 取り返しはつかないんですけどね、たしかに。——そうですねだから、悪い人を好きでいたっていいんだよ、つて。悪い人が誰かを好きになったっていいんだよ、つていうことは、うん。言つてやりたいのかなア。

一拍。

リイナ (雰囲気を変えて) でも、すごいですね、朋樹さんは。

朋樹 んん？ 何がですか？

リイナ 何を言われても怒らないし。いろいろと整理されてて。

朋樹 とんでもないですよ。何も整理なんかできていないですし、もう鬱陶しくしてしまう方がないですから。お二人とのこの、しからみが。

朋樹、笑う。つられてリイナも少し笑う。

リイナ 朋樹さんでもすつきりできない思いがあるんですね。

朋樹 あります・あります。なんで俺がこんなことしなくちやいけねえんだよ、とかそんなことばかり考えてますから、

リイナ ああ、そうだあの、朋樹さん。

朋樹 はい？

リイナ、カバンから、何やら封筒を出し、

リイナ (それを渡しつつ) これあの、晋也さんの、——ちょっと渡そうかどうか迷ったんですけど、

朋樹 ああ、なんか写真とかですかね？

リイナ ええ。あと、メモ書きとか。

朋樹 メモ書き？

リイナ なんか仕事でやんなきゃいけないこととか、買い物のもとか、その程度のものなんですけど、なんかこないだ整理してたら出てきちゃって。

朋樹 ああ、なんとも捨てにくいですよ、こういうのは。

リイナ ええ、なんか自分では、って、

朋樹 お預かりします。責任を持つてあの、こちらの方で。

リイナ あの、いずれね、——蓮に渡す分はちゃんと、別で取っておきましたんで。

間。

朋樹 やっぱ疲れちゃいますね。お互い。

リイナ ああ、そうですか？

朋樹 あちこちに地雷が埋まっています。どこ走っても爆発とかね。

間。

朋樹 整理なんかできてないんですよ、何も。——兄貴に対しては未だに腹が立つし、なんてことしてくれたんだ、って思いがあ

るし。でも、すげえ優しかったなあ、って思い出だって本当のこととで——。

間。

朋樹 何かを言葉にするっていうことはそれ自体、——どんなにがんばったってこう、嘘をついていくことにしかないじゃないですか？ 言葉にするほど、真実とか、正義とか、そういうものからはどんどん離れていくんだな、って、ああ、普段からそう思っているもんですからね、職業柄。だから、——そういうの全部、丸抱えでやっていくしかないんじゃないですかね？ 腹の中つぶつかつてる思いがこう、銃撃戦が続いていくような感じでも、焼け野原を抱えながら、もう、ずっと、ずっと——。というか、すげえ、暗くなつてきちゃいましたね？

間。

いつの間にかあたりは暗い。

リイナ ええ、さつきから、——だんだんと虫が。

朋樹 すごいですよこの辺は。蛾とかね。とんでもないサイズのが出来ますから、人間の頭ぐらいの、

リイナ ええー、嘘でしょ？

朋樹 嘘です。はい。ごめんなさい。

虫の音が大きくなる。

朋樹　ダイゴさんも。あのー、ね、いつでも相談に乗りますから。俺じゃなくても、そういう、トラブルに強い弁護士も、知り合い沢山いますんで。

ダイゴ　ありがとうございます。まあ、もうちょっと自分の中で整理が進んだら、お願いさせてもらうかもしれません。

朋樹、帰る準備を整えて。

朋樹　そしたらまた、蓮の結婚式かなんかには声掛けてやってください。金ぐらいしか出せませんけどね。

リイナ　はい。必ず。

朋樹　それもまあ、そんなに俺と親父と、生きてたらの話ですけど。

リイナ　いえいえ、そんな。

ダイゴ　結婚なんてする感じに育つかどうかも、わかんないですしね。

朋樹　ごもつとも。そんじゃあ、蓮が逮捕されるようなことがあったら、ね。いつでも弁護しますんで。

リイナ、頭を下げる。

朋樹、退場。

場面転換。

○　ダイゴとリイナ再び。

リイナはぐったり座っている。
ダイゴが例の壊れた椅子を運ぶ。

ダイゴ　どう？　もう車、乗れそう？

リイナ　ああ、大丈夫。——大分楽になって、

ダイゴ　無理しないでよ。

リイナ　うん。最悪、吐きながら帰るわ。

ダイゴ　やめろよ、人の車で。

リイナ　——今日まで隠し事をしてきた罰だよ。

ダイゴ　——ああ、置いてくわ、そしたらここに——

リイナ　——ごめんごめんごめん！　絶対に吐かないから乗せてつて。

ダイゴ　（ぬいぐるみを取り）この子だけ連れて帰らないと、
リイナ　（奪い返そうとし）やめてやめて、せめてこの子だけ

は、

ぬるいぐるみの取り合い。ダイゴの勝ち。

ダイゴ　離せて、うちの子だろ、もともと！

リイナ　——いや、そうだけど。そうだけでもさ。いいじゃん、今日ぐらい。

ダイゴ　あのき、あれ、デニス・ホッパーだよ。

リイナ　んん？　デニス・ホッパー？

ダイゴ　うん、さっきのき。銃弾で穴が空いて絵の価値が上がったってやつ。

リイナ　ああ、あの、モンローのやつ？

真っ暗の中、虫の声。

ダイゴ いや、モンローの絵を撃ったやつは、なんか知らんやつ
なんだけど。それとは別で、デニス・ホッパーがウォーホルの絵
を撃ったんだ。

ライナ ああ、別？

ダイゴ ——それで、撃たれて価値が上がったのはモンローの絵
じゃなくて、デニスが撃った別の絵の方。

ライナ ああ、そうだったっけ？ デニスってあの、『イージ
ー・ライダー』？

ダイゴ そうそう。デニスが部屋に入ったら、絵の中の男と目が
合ったんだって。それで、

ライナ ——へー。誰？ 絵の中の男って。

ダイゴ ええ？ あれだよ、中国のおっさんだよあのー、毛沢
東。

ライナ ほーん。毛沢東。——って、何した人だっけ？

ダイゴ (「知らない」の動作) ——なんか偉い人なんじゃない
い？ 人殺しだけど。

ライナ ——だからって、撃っちゃダメだよねえ。

ダイゴ、椅子に何らかの攻撃を加え、やがて夢中になって椅子
を破壊する。ライナはそれを無言で見ている。
やがてダイゴが疲れて止める。

間。

ライナ おい！ 帰りは代わってやろうか？

ダイゴ んん？

ライナ (立つ) 運転。

ダイゴ ——大丈夫だよ。

と、いつてダイゴ、帰る準備をする。

ライナ 遠慮すんなって。

ダイゴ 保険効かねえから。

ライナ 事故んねえよ、別に。

ダイゴ ——妊婦が運転したがるんじゃないよ。

ライナ 出た出た。そうやってまた半人前扱いされんだよ。

ダイゴ いたわってやってんだろ。うるせえな。

ふたり、退場。

幕

【参考文献】

当事者は嘘をつく 小松原織香

部長、その恋愛はセクハラです！ 牟田和恵

Boys 男の子はなぜ男らしく育つのか レイチェル・ギーザ

修復的司法とは何か―応報から関係修復へ ハワード・ゼア

犯罪被害の体験をこえて 生きる意味の再発見 ハワード・ゼア

アートとフェミニズムは誰のもの？ 村上由鶴